
異世界転移

夢幻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界転移

【Nコード】

N8850S

【作者名】

夢幻

【あらすじ】

学校で寝てると気が付けばまったく別の世界へ行ってしまった人の話です。一部だいたい4000文字ぐらいあるので、長いです。

第1話へ異世界へへ（前書き）

できれば、読んでってください!!!

第1話　異世界へ

「あーあ、なんかおもしろえことねーかな。」

どうもこんにちは。俺の名前は、古鳥咲弥ふるとり さくやといいまーす。最近、する事が、全くありませーん。というより、ぜーんぶあきましたー。

「……………あぁー！もう、する事なさすぎて、暇だぁぁぁぁぁあぁー！」

やばい、気狂ってきた。悪化する前にねよ。

四時間後

「……………プリン、かえせええええつ！なんだ、夢か。つて、何処だ、ここおぉー！」

俺さっきまで学校にいたよな！なのに、何で、俺は、森の中にいんだ！おかしいだろ。しかも、横にバカでけえ猪が寝てるしよおお！起きたら、死ぬぞ、こん畜生がぁぁぁぁぁあー！」

「とつ、とりあえず、起こさずにここから出ねーと。」

「ホントに、ここは、何処なんだ。」

森から出れて、町に着いたのはいいけど、なんで、周りの人は、獣耳なんだ？犬やら猫のような耳をつけて、恥ずかしくはねえーのか？

「すいませーん。」

「はい。なんでしょう？」

「ここは、何処でしょうか？」

「ここは、ウィザード共和国の、コンフューズタウンですよ。」
どこだよ、それ。

「わかりました。できればこの町を、案内してほしいんですが？」

イタタターな人なのか？

「あのー、ここから、どうやって、日本に帰るんですか？」

「？ にほんってなんですか？」

「……………えっ？わかりました。もういいです。世界地図をみせていただけますか？」

「何、言ってるんですか。ウィザード共和国以外国なんてないですよ？」

「はあああああああつこの国以外国がないiiiiiiiiiiiiiiii！」
「はいつ、そのとおりです。」

えっ、なにこれ。そうだ、これは夢なんだ。まだ寝てるんだ。そうじゃなきゃ困る。もし、夢じゃなきゃなんなんだ。

まさか、俺、別の世界に来たんか。そんなわけないよな。でも、町の人たちが、獣耳だったのが、本当の耳だったんなら、

恥ずかしい分けなないよなあ。最悪だ。なんで、俺が、別の世界に来なくちゃいけないーんだよ！

「あつ、あのーどうかしました？」

「いつ、いえ、なんでもあり」

「お前ら、国家軍か？」

「は？国家軍で、なんだよ。」

「知らないふりを、するなあああ！さては、貴様ら、国家軍だな！それでも、くらえ！“風の精霊よ、我に力を貸し与えたまえ、メテアリクト！”」

「逃げてください！咲弥さん！“風の精霊よ、我らと協力し、敵を討つ力を貸し与えたまえ！クレイスアブナ！”」

「うつ、うわあああああああああああああああああ！」

ドッガラガッシャー—————ン

ちよっ、周りの木々どんどん飛んでんですけどおおおおおお！

「で、今のは、なんだ！とりあえず状況を、説明しろ！」

練習しなきゃいけないのか、めんどくさっ！

「よしっ、もう一回やってみよう。」

「“炎の精霊よ、我に悪を討つ力を貸し与えたまえ！アスリマテリアル！”」

ドツカアアアアアアアアアアアアアアア

え？2かいめですよ。なんですか、この威力、ふざけているんですか？

「なっなんですか、今の！」

「知りませんよ！こっちが聞きたいです！」

「とりあえず、もう一回やってみてください。」

「“炎の精霊よ、我に悪を討つ力を貸し与えたまえ！アスリマテリアル！”」

ポンッ

「……………え？あなたは、さっき、本当に魔法を使いました？」

「使ったよ！俺が何かを使って魔法を使ったと思うのか！」

「そう思ったから聞いているんですよ！」

「わかった、もういい。とりあえずこれだけは言っておく。俺は、

魔法を使ったからな。」

「はあ、これで、レジスタンスに対抗できる仲間ができると、思ったのに……」

お前、俺が、仲間になるとおもってたのか？まあ、俺もそのつもりだったんだが。

「まあ、頑張って練習してみるわ。まともに使えるようになったら、お前の所に行くから、それまで頑張つといてくれ。」

「ということは、まともに魔法が使えるようになったら、私達の仲間になってくれるということですか？」

「そういうことだ、それじゃあ、またどこかで。」

「また会いましょう。」

「で、これから俺は、どーしたらいいんだ？」

がる。

「咲弥さん、お兄ちゃん、二人ともうるさい！」

「ごっ、ごめん。」 「すまなかった、エデュアアアアアアアアアア！」

「お兄ちゃん、うるさい！」

本当に、こいつ駄目だ。感情が暴走してやがる。

5分後

「さて、さつきは、すまなかった。」

「いや、分かってくれればいいんだけど。」

「お兄ちゃんって本当に人の話を聞かないよね。」

「はははははははは………」

こいつは普通の人なのか？ いや、シスコンって所で、普通じゃないか。

「そういえば、自己紹介してなかったな、俺の名前は、セルス・アルクールだ、セルスって呼んでくれ。で、咲弥は、こんな所で何をしてたんだ？」

こいつ、いきなり下の名前で呼び捨てかあああああああああああああああ！

「いや、こいつと、別れてから、魔法の練習をしようと思ったたらお前に襲われたんだよ。」

「だから、すまんって言ってたんだろうが。」

「咲弥さんって魔法の練習法も知らないのに、どこかに行こうとしてたんですか！」

「悪いかよ。この世界よくわかんねーんだから。」

「悪いですよ！レジスタンスに会ったらどうするつもりだったんですか！」

「全力で逃げる！」

「無理です、絶対に。」

最悪だ、思いつきり否定された……………

「そんなことないだろ、頑張ったらどうかなるって。」

「だから、無理なんですって、咲弥さんは知らないでしょうが、追尾型の魔法もあるんですからね。」

「……………まじか。」

勝手に行くんじゃないかった、今本当に、レジスタンスに会わなくてよかったあ。

「勝手に行って、すまん。それじゃあ、魔法の練習法を教えてくださいか？」

「とりあえず、撃ちまくることです。そうしたら、自然に威力が、上がっていきますから。」

……………本当に、この世界って適当だよな、絶対に。やること全てが簡単なんだよな、魔法の使い方も練習法も無茶苦茶だし。

「わかった、この近くで、練習できる所知らねーか？」

「ここから5時間、歩いた所に、流れの強い滝があります。そこで練習してください。」

「……………いやいやいやいや！遠すぎんだろ！なんでこんなに遠い所にあるんだよ。」

「だって、周りをよく見てくださいよ、レジスタンスがいっぱいいるですよ。そんな所で魔法を使ってみてください、考えたらわかるでしょう。」

「どう考えてもレジスタンスがよって来るな、俺死ぬな、思いつきり袋叩きだな。」

「でしょ、だから、一番近い所で、安全な所が、ここから5時間かかるんです。」

「マジでか、じゃあ、がんばってそこまでいつてくるわ。じゃあな。」

「待ってください。その滝への道は、交差点が多くて初めての人だと絶対に迷いますよ。だから、一緒に行かせてください！」

「良いけど、お前らも練習すんのか？」

「いえ、咲弥さんの練習を見ておきます。もう、練習しても、あまり変わらないので……………」。

「そうか、わかった、じゃあもしダメなところがあったら教えてくれ。」

「私達で力になれるなら。」

「えっ、それって俺も行くことになってんの？」

「当たり前でしょ、お兄ちゃん。」

「うわっ、めんどくさっ！」

「じゃあ、来るな、俺お前苦手だから。」

「これから行きましよう、咲弥さんっ！」

「はいはい、わかったよ。」

「これから俺どうなるんだ？」

第1話〜異世界へ〜（後書き）

読んでいただきありがとうございます！
感想またはダメ出しお願いします！

第二話く修行場へく（前書き）

やっと完成……………けっこう時間かった。それはおいといて読んでいってください！！！！！！

第二話　修行場へ

早く帰りたいんで誰かワープホールみたいなを出して俺を帰してください。

「なあ、そういえば、俺がまともに魔法が使えるようになってからじゃなかったっけ？」

「そういえばそうでしたね、咲弥さん。」

「えっ、お前達そんな約束してたの！」今驚いたのが、セルスⅡアルクールと言うエデュアの兄だ。

「してましたけど、どうしたのお兄ちゃん？」

「じゃあさ、俺ついていなくてもよくね？」

うん、ついてきたくないなら来なくていいよ、お前がいたらめんどくさいし。

「いやなら来なくていいよ、どうするお兄ちゃん？」

「いや行く、エデュアと離れたくないから、絶対に。」

忘れてた、こいつはシスコンって事忘れてた。本当にこいつは、

エデュアのことになるとうるさいからなー無茶苦茶うざいんだよな

「はあ、お兄ちゃん？何でいつもそんなにうるさいの？」

「それはだな、エデュアへの思いが溢れているからだ！」

「お兄ちゃん、気持ち悪いからちよつとの間話しかけてこないで…

………」

そりゃそんなこと叫ばれたらそうなるだろうな、セルスって妹のことになるとウザいほど気味が悪くなるだろうな……………」

「ちよつと待ってくれ！俺はエデュアと話せないだなんて、嫌だぞ。」

「お兄ちゃん、人の話聞いてた？」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

「謝って許されると思ったの？お兄ちゃん？」

「駄目なのか！……！！！」

「そんなことどうでもいいから、早く行こうぜ、いつまで喧嘩してんだ！！」

「あなたは黙っていてください！そろそろ本当にこの気持ち悪い性格を直してほしいんです！」

「そんな………こんなに嫌われてたなんて………」

「お前、今頃気が付いたのか。やっぱ俺は、お前のこと可哀そうにはまったく思えないわ（笑）」

「（笑）ってお前ひどすぎんだろ！何でこんなにいろいろ言われなくちゃいけないんだよ！」

「お前の性格が気持ち悪いからに決まってるだろ！馬鹿か、お前は！」

「そうだよ、お兄ちゃん。だから早くその性格直してよ！」

「はあ、俺はこんなに気持ち悪いと思われてたんだな………」

「……」

こいつ、マジでへこんでる、なんかすげー笑えてくる、こらえるのがけっこうきつい。

「そんなにへこまないでよ、お兄ちゃん。少しずつ直していこうよ。」

「」

こいつ、あんなにウザい兄にも優しいんだな。

「いいのか？こんなでも一緒にいてもいいのか？」

「当たり前でしょ！これでも兄妹なんだから！」

「やっと話が落ち着いてきた所だし、早く行こうぜ、日が暮れるぞ。」

「」

「そういえば、もう3時だな。」

「どうやったら時間が分かるんだ？」

「どうしたらって、この腕時計ですけど、咲弥さんの世界にはありませんでした？」

「いや、あったけどこっちの世界には無いと思っていたから、聞いてみた。」

「そうですか、じゃあそろそろ行きましょう。咲弥さんとお兄ちゃんの下がっててください。」

「おっ、あれをやるのか。」

「おい、セルスあれって何だよ、教えてくれよ。」

.....

「頼む、黙るのだけは止めてくれ、本当に頼む、お願いだ。」

「わかった、風と地の混合魔法だよ、いつもこれで数時間かけて行く所を数分で行けるんだよ。」

「え、ちょっと待て、もしお前らが付いてこなかったら俺一人で歩くことになったのか？」

「今頃かよ、そんなんじゃないかつたらお前に道教えてどっかに行つてゐるよ。」

「そうか、初めてお前がいてよかったと思ったわ。」

「え、ちよつと待て、お前らじゃなくてお前なんだ」

「そんなこと聞かなくてもわかるだろ、お前のことを信用して無いってこと。」

[illegible]

「だからどうした？」

「お前何でそんなひどい事簡単に言えるんだよ、お前の頭の中がよく分からないよ。」

「お前にはわからなくていい。わかってもいいことも悪いことも無いのだから。」

「何かっこつけてんの？ やっぱ俺はお前のことがよくわからん。」

「あの一、いつになったら下がってくれますか、咲弥さん、お兄ちゃん？」

「すまんすまん、今すぐ移動するわ。」

「できるだけ早くお願いしますねー。よしつ、風の精霊よ、新たにできた物体を動かすのを手伝いたまえ、地の精霊よ、風の精霊が動かす物体を作れたまえ！メイクレブスリアスタ！」

バキバキバキバキバキバキメキツ

「でーきたつと、さあみなさんこれに乗ってください！……………」

…………… 乗りましたね、じゃあいきますよお

おおおおおおおお！メイクレブスリアスタ！」

「なんで二回も言うんだ？つてうわああああああああああああああああああ！！！！！！」

ブワアアアアアアアアアアアアアアアアア

40分後

「着きましたよー、咲弥さん、お兄ちゃんって咲弥さん大丈夫で
すか！」

「やつぱ、初めはそうなるか、でもこんなにひどいやつは、初めて
見たわ（笑）」

「（笑）じゃないですよ！泡吹いて倒れてるんですよ！早く助けな
いと！草の精霊よ、目の前の物体の傷を癒し助けたまえ！マテルス
ケアリウル！」

シウアアアアアアアアアア

「ん、何があつたんだ？」

「何があつたじゃねーよ、お前は今の今まで泡吹いて倒れてたんだ
よ、でエデュアの魔法で助かったわけ。理解できた？」

「俺はそこまで馬鹿じゃねーよ。とりあえず、エデュアありがとな。」

「へっ？あつ、はい！どういたしまして。」

「…………… お前今何考えてた。」

「えっ、なっ何も考えてませんよ！」

「そうか、でも今の言い方なんか怪しいな。」

ギクッ

「なんだ、今の効果音？」

「痛ああああああああああああああ！腰があああああああ

あああああああ！」

「うるせーぞ！セルス！」

「そんなこと言われたって、突然ぎっくり腰になると思うか？」

「……普通は思わねえな、すまん、怒鳴って。」

「いいけど、俺今ここから動けないから薬草取ってきてくれないか？」

「おう、分かった、じゃあ行ってくるわ。」

「……あっ、どの薬草取ってくるか言いました？」

「あ、言うの忘れた。」

「忘れてたじゃないよ、お兄ちゃん！俺の近くまで行ったら俺の音で何も聞こえないんだよ！どうするのお兄ちゃん！呼び出しの魔法も俺のせいで聞こえないし、ああ〜どうしよう、何もおもいつかないii！！！」

「なんでそんなに必死なんだ？」

「えっ？お兄ちゃんがぎっくり腰になったからに決まってるでしょっ！」

「……そうか、そうだな、それ以外の理由なんて思いつかなかったしな。」

「じゃあ早く行って言うてくる。そこで寝て待っててよ、お兄ちゃん！」

「はあ、本当は背中骨が折れてるなんて言えない……」

「遠すぎるだろ、さっきの場所から見えてたのに40分歩いても着かないのか、はあ……」

俺はさっきも言ったとおりけっこうきつい山道を40分ほど歩いているんだ、元の世界の俺だったらもうぶっ倒れてるな。

「はあはあ、まだつかねえ、しかも迷ったし……」

.....早く元の世界に帰りたい。」

「ん？今なんか聞こえた気がする、まあ気のせいかな？」

「やっぱりなんか聞こえる、気のせいなのか？」

ガバアッ

「誰だ！そこにいるのは！」

「咲弥さん、ちょっと待ってくださいよ、薬草のこと聞いてないでしょう。」

「なんだエデュアか、あーびっくりしたあ。」

「どうしました？まさかレジスタンスに会ったんですか？」

「いや、エデュアのことをレジスタンスと間違えたただけだ。」

「咲弥さん、そんなこと言わないでください、私は王国軍ですよ。」

「そんなことは、わかってるって、で、話を変えるがいつになつたら滝につくんだ？」

「森の入り口にワープホールがあるのでそれに乗ったら着きますよ。」

「.....それを早く言ってくれ、なんのた

めにここまで歩いたんだ、俺は。」

「滝に行くためじゃないんですか？」

「そうだけど、たしかにそうだけど、どう頑張っても滝に着かないんだよ！」

「だって、ここに滝なんて無いんですから。着くわけじゃないですよ。」

「は？じゃあ何でこんな所に来たんだ？」

「もう一度言いますよ、ここにワープホールがあるからですよ。」

「じゃあワープホール以外の移動方法はないんだな」

「はい、そうですね、何か問題でも？」

「大有りだ、当たり前だろ、そんなこともわからないのか？」

「だって、そこにあるじゃないですか、ワープホールが。」

「えっ？マジで！……………本当だ、こんな所にある。」

「でも、咲弥さん、入り口で右に曲がったらすぐにここに行けたのに、まっすぐ進んだのですか？」

「俺この世界来たの初めてだからよくわからないんだよ、お前等に道教えてもらおうとしたら、セルスがぎっくり腰になったんだろ、おかげで聞きそびれたんだよ。」

「そうだったんですか、それならまあいいです。早く行きましょう、アップサイドダウンフォールへ！！」

「やっとともに進めるけど、いつになったら俺帰れるの？誰か教えてくれませんか？早く帰らせるおおおおおおおおおお！！！！」

第二話く修行場へく（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます、

第三話　修行開始（前書き）

だいぶ時間かった……

第三話　修行開始

「へー、こんなに簡単に行けたのか。」

「はい！知らないのは咲弥さんだけです、ほとんどの国家軍はここで練習してレジスタンスと戦っているんですよ。」

「へー、で、今思ったけど反乱軍のことは、レジスタンスって言うけど、国家軍はなんて言うんだ？」

「そういえば、言ってませんでしたね、国家軍はニュートラルって言います、中立って意味なのに思い切り戦ってますよね。」

「確かにそうだな、んじゃそろそろ始めよう、やり方は魔法を打ちまくったらいいんだろ？」

「はい、確かにそうですね。言葉で覚えるより体でおぼえる方が早いですしね。」

「じゃやってみよ、炎の精霊よ、我に悪を討つ力を貸し与えたまえ！アスリマテリアル！」
「ぱちっ」

「……………あのーまったく届かないんですけど、どうしたらいいんですか？」

「それは咲弥さんが下手だからです、俺に届けば威力はけっこう高くなっていますから、伝説の龍の魔法使いもここで特訓したらいいですから。」

「へー、そうなんだ、でもそれって何万回も撃たなくちゃいけないんだろ。」

「そりゃそうでうしよ、めんどくさくてもやらないと意味が無いですから。」

「あーもうめんどくさいとか言ったらんねえ！炎の精霊よ、我に悪を討つ力を貸し与えたまえ！アスリマテリアル！」
「ポンッ」

「なあエデュア、これって別の言葉を繋げたらなんか変わるの？」

「さあ？途中で詠唱を増やす人はいませんでしたけど…… やつてみたらどうです？」

「じゃあ、炎の精霊よ、我に悪を討つ力を貸し与えたまえ！アスリマテリアル！煉獄！」

バコオオオオオオオオオン

「おつ、威力上がった、やった。」

「やったじゃないですよ、どれだけ威力上げたらいいんですか！」

「知らないよ、そんなこと言ったら、言われた事やっただけだから、いろいろ言うな。」

「ちよつ、ちよつと私も試してみます！風の精霊よ、我らと協力し、敵を討つ力を貸し与えたまえ！クレイスアブナ！連弾！」

ドッドドドオオオオオオオオオン

「っ！本当に上がったちゃいました……… こんなことがあるなんて。」

「これってみんな知らなかったのか？適当に思いついたことなんだが。」

「みんな頑張つて練習して強くなってるんですから、言葉を増やしただけで威力が上がるなんて考えないと思いますよ。」

へえ、そうなんだ、みんな努力してるんだ。じゃあこつちもあまり使わないようにしないとみんなまねするんだろうな。

「じゃあ練習続けますか。めんどくさいけど。」

「へえー言葉を足して練習すると思っていました。そこまで馬鹿ではないんですね！」

誰が馬鹿だ！ふざけるな！こつちは頑張つて練習しようと思ったのに馬鹿だと！どれだけ信用無いんだ。

「そこまで馬鹿じゃねえよ、なめんな！」

「いやあー、おもいつきり魔法に言葉を足して暴れると思っていたんですけど、気のせいでしたね。」

やっぱり誤解してた……… いつも会ったやつには誤解されるんだよなあー、今までできた友達は絶対にサボリ癖があると

見るか！水の精霊よ、目の前の物体を流しつくせ！エイブンレクイアス！」

ピツチャン

ピツチャン

「うぎゃあああああ！！！！まったく出てこねええええええ！！！」

「咲弥さん！言葉をたしてください！！！」

「あ、そつかその手があつたか！もう一度やってみる！水の精霊よ、目の前の物体を流しつくせ！エイブンレクイアス！激流！」

ブワアシアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

シュウウウウウ

「はあはあ、なんとか消えた……………疲れたあああああああ！！！！こんなに疲れるのか、魔法って！」

「疲れるのかつて、山を無くすぐらい魔法使ったら疲れるに決まってるでしょう、ちゃんと考えて使ってください！」

え、俺、山ぶっ壊したの？と言うより、あんまりうまくないんだから、調整なんかできるわけないだろ！はあこの世界に来ていいことあんまり無いな、いいかげん早く帰りたい、いつになったらこれ帰れるの？誰か教えてくれ。

ドサツ

「咲弥さん！咲弥さん！大丈夫ですか！あゝ！また咲弥さんが倒れたあああ！！！！また回復させないと！草の精霊よ、目の前の物体の傷を癒し助けたまえ！マテルスケアリウル！」

シュワアアアアアアアアアア

「ん？エデュア？なにがあつた？」

「また倒れたんですよ。」

俺なんで倒れたんだ？魔法使いすぎたからか？それとも魔法を誰かから撃たれたのか？まあ、どっちでもいいか。

「エデュア、そろそろ始めようぜ！」

「はあ、咲弥さん、あなたは馬鹿なんですか？さっき魔法の使いすぎで倒れたのにまだやるんですか！」

当たり前だ、考えてみる、俺は早く帰りたいんだっ！！！こんな所いつまでもいてられるか、早く帰らせる！！

「まあ、いいですけど、また倒れても知りませんよ？」

「気にすんなっ！！」

「今、はつきりとわかりました、咲弥さんは正真正銘の馬鹿ですね！」

ぐっ！こいつ酷い事言いやがる……………、早く帰りたいから、レジスタンスのリーダーにあたる野郎を潰したら帰れると思ったから、できるだけ強くなって倒そうと考えてたのに、馬鹿って酷いなあ……。

「……………まあ、あんまり気にするな……………、はあ。」

「馬鹿に馬鹿って言っても問題は無いでしょう？」

やっぱり酷い……………、努力したら実を結ぶってことを信じて頑張ろうとしてたのに、馬鹿って酷いなあ……………。いい加減に修行の続きさせてくれよ……………。

「もう馬鹿ってことは認めるから、もういい加減修行の続きを始めようぜ。」

「あなたは休憩することを知らないんですか？」

「早く帰りたいから修行を始めようって言ってるの！」

「そうでしたか、でも自分の体力の事も考えてくださいよ。」

こんな騒動で修行がまったくできなかった、できるだけ早く帰りたいのに、なんかまったく帰れる気がしない……………。誰か帰れる方法教えてくださーい！！

第三話〜修行開始〜（後書き）

読んでいただきありがとうございます！
後、次の更新だいが遅くなります。

第4話〜新たな事実〜（前書き）

更新遅れましたが、何とか書き終えました
今回は新キャラが2人、登場です。

第4話　新たな事実

「なんで今お前俺に体力のことを考えろって言ったけど、俺体力には自信あるんだぜ。」

「でも、咲弥さんさつきから息切れてますよ。」

「ぐっ！正論を言うな、そんなことぐらいわかってる、わかっているけど早く帰りたいんだ！無茶苦茶帰りたいんだ！帰るために頑張っているんだ、そんなこと言わないでくれ！」

「まあ、馬鹿だから気が付かないんでしょうが。」

「最近、エデュアからの言葉に毒が入っていることが多い……。いい加減馬鹿馬鹿言うのをやめてくんねえかな。」

「お願い、もうやめて、俺の精神がもたない……。嫌です！！！」

「きつぱりと言われたあああああ！！もう嫌、こんな世界早く帰りたい……。」

「なっ、なんで、嫌なんだエデュア、そして、お前人の気持ち考えたことある？」

「最初の質問から答えますね、嫌だからです。二つ目は、考える訳ないでしょう、いじめる対象の気持ちなんて。」

「あゝ、やっぱりいじめてた。おまえDSだろ。」

「それ以外の何だと言うのですか？」

「ぎゃー！！！！もうなんっつにも言い返すことがなあああああああい！！！！」

「……………」

「どうしました、咲弥さん。もう言うこと無くなっちゃたんですか？」

「心読まれた！こういう時どうしたらいいんだ！……………、そうだ！練習の話に戻したらいいんだ、よしそうしよう。」

「そんなことは、どうでもいいから早く練習始めようぜ！」

「話を変えないでください、なんで何も答えられないんですか？今すぐに答えてください！はい！いうことは？」

うぎゃあああああああ！！こいつにもう言い返す事がないって分かって言ってるよ！

「……………もう、何も言う事はありません……………。文句言ってすいませんでした。」

結局、謝ることしかもう方法がなかった……………。まったく言い返せない、言う事が酷いから。

「じゃあ、そろそろ練習に戻りましょっか。」

「うん、そうだな。……………はあ。」

もう嫌、今すぐにでも、帰りたい。こんなとこ早く出たい。

「よし、やるぞ。炎の精霊よ、我に悪を討つ力を貸し与えたまえ！アスリマテリアル！」

「…………………………。」

「…………………………出ませんね。」

「出ないな。魔力でもなくなったか？」

「この世界で、魔力なんてありませんよ。疲れたんじゃないんですか？」

「いや、あんまり。と言うか、この世界魔力無いの？」

「そうですよ、ここでは、精霊に力を借りるとき、魔力ではなく、精神力を使って精霊を呼び出すんですよ。」

へー、そうなのか。疲れたら、魔法使えなくなるのか。めんどくさいな、この世界。じゃあ、魔法を使わなくても修行できるんじゃないか？

「わかった、じゃあ、座禅でも組んで休んでみる。」

「はあ、そうですか。じゃあ私は、薬草を取ってお兄ちゃんの所へ帰ります、それでは。」

やっと、一人になれる。真面目に座禅を組むことなんか、集中力なんて持たないけど。

ブウオオオン

「さて、始めるか、座禅。」

「お兄ちゃんって、確かぎっくり腰だったよね……。なら、この薬草とこれを配合すれば、骨を直す成分ができるはず。」

ガサガサッ

「誰っ！！」

「誰って言うなよ、エデュアよ。」

「お兄ちゃん？」

あれ？お兄ちゃんってこんな話し方だっけ……。お兄ちゃんには悪いけど、まったく覚えてない……。

「こんな所で、何をしてるんだ、早く帰るぞ。」

あ！お兄ちゃんは、ぎっくり腰で動けないんだった！じゃあ、このお兄ちゃんは偽物！

「あなたは誰っ！お兄ちゃんじゃない！」

「へー、もう気が付いたんですか。普通の人ならまったく気が付かないのに。まあ、正体を明かしましょうか。僕は、レジスタンスの幹部の一人のアース＝デルベルスと申します。以後、お見知りおきを。と言うわけで、ここで死んでいただきます。エデュアさん？」

「どうして私の名前を、知っているのですか？」

「それは、あなたが、ニュートラルの幹部の一人だからです。」

そういえば、そうだっけ？あんまりニュートラルの仕事に参加してなかったから、そんなこと忘れてた。

「それに何の関係があるのでしょうか、アース＝デルベルスさん？」
「あなたの存在が結構邪魔なんですよ。僕たちレジスタンスにとって。仲間の治癒には、普通10分以上かかるのに、あなたはなぜか1分以内に終わらせることができるほどの強さを持っているからです。」

へー、普通、人を回復させるのにそんなに時間がかかるのですか。いつもすぐに終わらせていたから、分かりませんでした。そんなに

私、早かったんですね。幹部になれた理由がようやくわかりました。「それで？私に何の用でしょうか。えーと、誰でしたっけ。」

私、早かったんですね。幹部になれた理由がようやくわかりました。「それで？私に何の用でしょうか。えーと、誰でしたっけ。」

「アース＝デルベルスだ。名前を覚えておいてくれ。あと、もう一度言う、ここで死んでくれ。」

「それでいいって言うと思うっ?」

「いえ、思いません、だからここで殺されてください！地の精霊よ、我の一部となりて、全てを滅ぼせ！

メテオアビスベリクス！」

げ、この人、魔法を自分に当てて戦うタイプに人だ！

「早く倒さないと……、こういうタイプの人ほとんど暴れてくる！」

「へー、やっぱり、分かってるんですね。その通り、私は、魔法を自分に当てて戦います、でも、どんどん暴れたりなんかはしませんよ。」

じゃあ、一気に決めてくるタイプか！

「暴れる前に殺しますよ。」

違った！

「できるものなら、やってみなさい。できるならね？」

「ほう、そうきますか。大体の人は僕の威圧感を感じて逃げ出すんですけど。まあいいでしょう。エデュアさん、覚悟！」

「あー、始めるって言ったけど、やる気が、まったく出てこねえ。」
エデュア、帰れたのかなあ、薬草のこと忘れて帰ってたら笑えるな。

「……やらねえと帰れないし、ちゃんとやるか。……」

⋮
○
└

「……で、誰、お前？」

「お前こそ、誰？俺、今さつき着いたらなんかいたんだけど。」
「なんかって……、人だから見たらわかるだろ……。まあ、俺は、」

この世界の人たちみたいに獣耳はついてないけどさあ。

「じゃあ、自己紹介するわ。俺は、咲弥って言う、よろしく。」

「僕は、クリア＝デルベルスって言うよ。ニュートラルに入ってるよ。」

「おおー、じゃあ仲間だな。よろしく！」

「で、なにしてんの？」

「座禅。」

「なにそれ？」

この世界には、座禅って言葉もないのか？

「足組んで、集中する修行みたいなもの。」

「ああー、それ知ってる。へー、座禅って言うんだ。」

なんだ、この世界にない事じゃなかった。よかった。いちいち説明するのめんどくさいし。

「うん、座禅って言うけど、そういう、お前は何しに来たんだ？」

「道に迷ったら、ここに着いた！」

あ、こいつ、馬鹿だ。俺より、ひどい馬鹿だ！

「ふーん。じゃあ、一緒に練習しようぜ！座って話すよりさあ！」

「そうだな！早く始めようぜ！じゃあこっちから撃つぞ！炎の精霊よ！我と共に協力して、敵を倒せ！スレイブインペルク！」

「おおー、すげえ！そんなこともできるのか！」

「お前って、別次元から来たの？」

え、今こいつなんて言った？

「お、おいつ、今、お前なんて言った？」

「え、お前って、別次元から来たの？って聞いたけど、なんかあった？」

「いや、合ってるからさ、他にも別次元から来た人いるの？」

「うん、結構いるよ。周りの人の中で耳が犬がこの世界の人、猫とかお前のような耳のやつは、別次元の人だったと思うよ。」

思っなのかよ……こっちは早く帰りたいのに。って、待てよ！他にもいるなら、その人たちは、俺より前に来てるって事だろ。だっ

たら、
帰る方法知
ってるんじ
ゃないのか
！

「わかった、ありがとう。今度その人達に帰る方法聞いてみる。」

「え、マジで！合ってたの！そりゃ、知らないな。最近できた、戦い方だから。」

今までであったものじゃなかったんだ。こういう戦い方する人にどうやって対応しようか……。俺みたいな遠距離攻撃ならこっちも遠距離攻撃を当てたら防げるけど、あっちから来られたら、一時的に動きを止めれるだけで、どんどん来るから、意味はほとんど時間稼ぎにしかないし、どうしようか……………。

「おい、大丈夫か！突然どうしたんだ、なにか考え事かー！」

「すまん、すまん！お前のような戦い方のやつは、どう対応したらいいのかなと思って。」

「ああ、そんなことか、じゃあこの魔法の種類の弱点を言うよ。こ
うゆう魔法って、あんまり長く持たないんだよ、だから、長期戦に
持ち込んだら大体は勝てるよ。」

「なんでそんなに親切なんだ？ 今から戦うのに。」

「そんなの決まってるじゃん。すぐに終わらせるからだよ！」

おい！いきなり来るな。畜生！早く止めないと……。

「炎の精霊よ、我に悪を討つ力を貸し与えたまえ！アスリマテリアル！」

バンツ

「ちよつ、これ、邪魔！ つて、体動かねええええ！！！ 何だこりや
！」

え、なに！もう意味わかんねえ！

「どうかしたのか！動かねえってどういうことだ！」

「なんでか知らねえけど、体が動かねえんだけど、お前なんかしたか！」

「いや、なんにもやってねえ！というか、こつちもパニックになつてゐるからなにがなんやらわかんねえ！」

「じゃあ、お前の魔法は毒も混ざっているのか、たまにそういうタ

イブいるから。」

なに、俺またおかしいこと言われてる？今、毒がどうか言ってたよな。もう、自分の事すらわかんなくなってきた。

「ごめん、もう何もかもが意味わからなくなってきた。説明してくれ。」

「だから、お前の魔法に毒の追加能力があると思うって言ったの。他の追加能力なら、重力追加とか、魔法一時禁止とかがあるよ。」

ああ、わかった、覚えることが多すぎる。えーと、とりあえず俺の魔法には、行動不能の毒の追加能力があるってことか、………ってじゃあ練習しても、何にも上達しないのは、この毒のせいじゃないのか？

「なあ、こういう追加能力があるやつって上達遅いの？」

「多分、遅いよ。毒の能力にもゲームで言う経験値が振られるから、全部が一緒に育ってるって感じだから、遅いと思うよ。」

嘘だろ、と言う事は、俺は普通の人より以上に努力しなけりやいけないのか！めんどくせえ！もう、今すぐにでも帰りたい……、誰か帰る方法教えてください……、お願いします。」

「多分無理だと思うよ。帰るの。」

「お前、心読めるの？」

「小さな声で言ってたよ、僕、耳はいいから。」

へー、って声に出てたんかい、俺の心の声！だるっ、と言う事は今までの会話全部口に出てたって事？

「なっ、なあ、今まで、思ってたこと、口に出てた？」

「いや、今のただけかどうかしたのか？」

「いや、今までいろいろ考えてたから、口に出てたら、恥ずかしいじゃん。」

「そうか？僕、大体思ったこと言ってるから、そういう事考えたこと無い（笑）」

「馬鹿だろ、お前、絶対に馬鹿だろ。」

「そうだよ、学力もそんなにないよ、それがどうかしたの？」

馬鹿だ、こいつ、人の話を理解してない。

「もういい、そろそろ修行再開するぞ。」

「ええー、めんどくさいな、と言うより、毒治らないんだけど、普通なら、時間が経てば治るんだけどな、お前の毒、効果が長いな。」

「へー、じゃあ、ちよつと休憩するか。」

あーあ、また、修行できねえ、早く帰りたい、帰らせてくれ。誰でもいいから帰る方法教えてください。

第4話〈新たな事実〉（後書き）

サブタイトル、メチャクチャですいません。

第5話〜試合終了〜（前書き）

遅れました！

第5話〜試合終了〜

「くっ、まさかこんなにてこずるとは、思いませんでした、さっさと死んでくださいよ。エデュアさん？」

この人、結構早い…、遠くから攻撃したら、弾かれるし、どんどん近づいてくるから、逃げないといけないし、さあて、どうしようか……。

「そんな事言われて死ぬなんて思わないでくださいよ！風の精霊よ、我らと協力し、敵を討つ力を貸し与えたまえ！クレイスアブナ！」
ブワアアアアアア

「何処狙ってるんですか、僕はここにいますよ。そんなにもない所に撃たないでも……。」

よしっ、まだあいつは気がついてないな、この行動でどうするこ
とができるかな、とりあえず周りの岩を砕いて岩を落としてみるの
はどうか。

「何を考えているかは知りませんが、無駄な抵抗は止めてください
よ。時間の無駄ですから。」

「大丈夫です。時間の無駄じゃなくて準備をしてるだけですから。」
「なんの準備ですか、何をやっても無駄なのに。」

うん、なにも思いつかなくなってきた。周りには木と今砕いた岩
しかないし、どうしよう。逃げるか……、そういえば、まだ、3つ
の混合魔法使ったことが無かったな……、やってみるか！

「草の精霊よ、目の前の相手を固定し、力を奪い去れ。地の精霊よ、
我の周りの岩を集め相手に突撃せよ。風の精霊よ、風の刃で、相手
を切り刻め！ルーゼドヴィオンウィングロム！」

シユルルルル バチッ しゅううう

ボコッ ゴゴゴゴゴゴッ グウン バキツメキツ
ヒュン ズシャッ

「っ、よくもやってくれましたね。まさか、三つの混合魔法を使っ

てくるとは、思いませんでした。こんな状況で撃ってきたら、普通は意識が詠唱中に保てなくなるはずなんですが、すごい精神力ですね。」

「そうなのですか？」

「しらなかつたんですか？」

「はい！」

「そうですか、なんで知らないんですか……。それでもあなたは、ニュートラルの幹部の一人ですか……？」

「その事ですけど、私、幹部って事、完全に忘れてましたから、そんなこと言われても困ります。」

「そんな事、こっちも困ります、先に言ってください。とりあえず、今気が付いたんだが、右腕が無くなってるから、帰らせてもらいます。」

「早く右腕、復活させて帰ってきてくださいよ。」

「あなたは、何も考えていないんですか……？」

「ほぼ、何も考えてませんね。考える意味がありませんので。」

「そういう事ですか。なんで、幹部になれたんですか？」

「なんででしょうね、自分でも、わかりませんね。気が付いたら、幹部になつてたんですから。」

「なぜかは、しりませーん。」

「ちよつと軽すぎませんか？」

「気にしないで、ください。そろそろ、帰らないと、腕戻らなくなりますよ？」

「そうですね、じゃあ次、会った時、覚悟してて、ください。」

「さよーならー。」

ふう、何しに来たんだろう……。突然出てきて、暴れるだけ暴れて、急に帰るし。周りの岩壊した意味なかったなあ。

「で、私、何しに帰ってたんですか……？ 咲弥さんの所に一回行って見ましょうか。」

「なあ、咲弥。お前、今座ってるけど、まだ、毒解けないぞ。どう
いうことだ。」

「知らん！」

「『知らん！』じゃないって、解いてくれって。」

人に魔法当てたことが無いから、毒の効果があるなんて知らなかつたんだし、まず、俺この世界の人じゃないから、直す方法なんてわかんねえよ！

「頼む、治す方法教えてくれ。」

「……………」

「なんか言えよ。」

「おーい、聞こえてるか。治す方法教えろって。」

「……………」

「なぐっていい？」

「おーい。聞こえてんのか！殴るぞ！」

「お前のせいで疲れたんだよ、治す方法は治癒魔法でも、使って治してくれ。」

「おう！えーと、確かエデュアが治癒魔法を使う時、草の魔法使ってたな。よし、草の精霊よ、我の友の体を治したまえ！クリストワ
イライトホライズン！」

「……………」

「何にも起きねえ！さっきまで魔法使いまくったからか！？」

「とりあえずどうにかして、これ治して……」

ヤバい、どうしよう、魔法使いすぎて落ち着かねえ！

「いい加減、治してくれないか？ずっと前屈みは辛いんだぞ。」

「ははは……、そりゃ悪かった。とりあえず、お前の体制を直すから。」

「早くしてくれ、足が死にそう。」

「……ゴメン、今すぐやる、よっこらっせつと。」

「やっと、楽になった……、もう一回、魔法使ってみてくれ。」

「わかったぜ！草の精霊よ、我の友の体を治したまえ！クリストワ

イライトホライズン！」

「……………」

「……………」

「……………」、薬草でも採ってくる。」

「そうしてくれ。俺、もう死にそう。」

「えーっと、咲弥さんの所には、どうやって行くんですか……、完全に忘れちゃった。」

咲弥さんが帰ってくるのを、待ってみましょうか。

「それにしてもすることが無いですね、無駄に、魔法でも撃ちますか。風の精霊よ、我々と協力し、敵を討つ力を貸し与えたまえ！クレイスアブナ！」

「よっ、エデュア。何してんのって、なんか来たああ！！」
バコーン

「いつてえ！なんだよ、いきなり。さっきの仕返しか？」

「すいません、暇だから撃ったら当たってしまいました。」

「もう、いいや。で、お前、こんな所で何してんだ。セルスはどうした。」

「あつ！お兄ちゃんの事忘れてました！今から行かないと！」

「ちよつと待て！エデュア、お前、解毒の効果がある、薬草ないか？」

「どうしたんですか？茸にでもあたったんですか？」

「いや、違うけど。友だちがさつき出来て、魔法の練習してたんだけど、なんか追加効果で、毒で動かないから、治癒魔法を使って、治そうとしたけど、精神力まったく無くて回復できなかったから、薬草を使おうと考えてね。」

「そうですか。でも、薬草使うのにも、精神力いること知ってました？」

「えっ？マジで？あいつ、あの時言ってくればよかったのに。」

「じゃあ、とりあえず、その人の所に行きましょうか。」

「そうだな。」

「すげえ腰痛い。まだ、エデュアはまだ帰ってこないのか？あゝ、早くエデュアに会いたいゝ！」

ガサガサッ

「だれっ！もしかしてエデュア！ってまったく知らない人だった……。」

「あなたは？」

「セルスって言うけど、お前は？」

「狩野華菜^{かりや かな}だけど、そこで何をしているの？」

「妹を待つてる所だな。これからどこ行くんだ？」

「行くところは、決まっていらないので、あなたと、一緒にいます。あと、魔法を教えてくださいませんか？」

「良いけど、何するために？」

「行方不明の友達を探すために……。」

「そいつの名前は？」

「古鳥咲弥……。私のいた世界の同級生です。」

「あー！！そいつ知ってる！ちよつと前に妹と一緒に森の中に入ってたぞ！」

「本当ですか！教えてくれてありがとうございます。それでは。」

「じゃあな。」

「おーい、クリア！薬草持つてる人連れてきたぞ！」

「じゃあ、いきますよ。草の精霊よ、目の前の物体の傷を癒し助けたまえ！マテルスケアリウル！」

シユワアアアア

「よし、治った！ってアースさん！？右腕は治ったんですか！？」

「あー、それ兄さんですね。俺は、ニユートラルに入ってる、クリア＝デルベルスって言います。んで、兄が、レジスタンスに入ってるアース＝デルベルスって言う人だよ、エデュアさん。」

「なんで私の名前を？」

「あなたはニユートラルの幹部ですよ。同じ団体の部下が知らないわけがないでしょう。」

「そういえば、私幹部でしたね。また、忘れてました。」

「エデュア、お前、物忘れ激しいな。だから、セルスの事も忘れてんだろ。」

「あ、忘れてました。とりあえず、戻りましょうか。」

「そうだな、いい加減セルスのことが、心配になるし。エデュアがアースって人のことを、知ってるってことは、今会ったってことだから、アースって人はこの滝の近くから出ようとしているのかもしれないしな。」

「鋭いですね。確かに今さっき会いました。しかし、アースさんの右腕は私が消してしまいましたので、襲うことは無いと思います。」

「エデュアさん、兄さんの右腕を消し去ったんですか！？」

「えーと、思い切り魔法をぶつけたら、消えちゃいました。」

「消してしまいましたじゃ、ないですよ！兄さんは、レジスタンスの、幹部の一人ですよ！腕を無くさせるなんて、すごいことですよ！」

「でも、すぐ治すって言うてましたけど。」

「兄さんは、治癒系の魔法が苦手なんです。だから、誰かに頼んで治してもらってるか、何もしてないかもしれないんです。」

「じゃあ、まだこの近くににいるかもしれないんですね。」

「その可能性は、すごく高いです。」

「じゃあ、今から、探してきます！ここで待っててください！」

「ちよっ、エデュア！今から行くのか！お前また、セルスの事忘れてるだろ！」

「あっ、忘れてました！でも、アースさんの方が先です！みんなで行きますよ！」

「なんで、みんなで！？治癒魔法使えるのお前だけだぞ！」

「あのー、咲弥。俺、治癒魔法使えるぞ。」

「そんな事今言わなくていいから！」

「あのー、早く行きますよ。アースさんが心配です。」

「じゃあ、とつとと行くぞ！セルスの事が心配だしな、あいつ絶対骨折れてるぞ。」

「え…、本当ですか！？何でわかつたんですか？」

「あいつの骨から出た音が変わったからだよ！だから、早く、アースって人の所に行って、その後、セルスの所行くぞ！」

「そうですね、そうしましょう！アースさんの所にレッツ、ゴー！」

「「おう！」」

第5話〜試合終了〜（後書き）

読みにくくてすみません……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8850s/>

異世界転移

2011年11月14日18時20分発行